２０１２年に改訂される前の、２０１１年の野球規則の原文

二・七六　TAG「タッグ」（触球）――野手が、手またはグラブに確実にボールを保持して、その身体を塁に触れる行為、あるいは確実に保持したボールを走者に触れるか、手またはグラブに確実にボールを保持して、その手またはグラブを走者に触れる行為をいう。

三・一五　試合中は、ユニフォームを着たプレーヤーおよびコーチ、監督、ホームチームによって公認されている報道写真班、審判員、制服を着た警官、ならびにホームチームの警備員、その他の従業員のほかは、競技場内に入ってはならない。

競技場内に入ることを公認された人（試合に参加している攻撃側メンバー、コーチスボックス内のベースコーチあるいは審判員を除く）が競技を妨害したとき、その妨害が故意でないときは、ボールインプレイである。しかし故意の妨害のときには、妨害と同時にボールデッドとなり、審判員は、もし妨害がなかったら競技はどのような状態になったかを判断して、ボールデッド後の処置をとる。

【付記】　前記カッコ内の攻撃側メンバー、ベースコーチおよび審判員については七・一一、七・〇八(b)、五・〇八および五・〇九(b)参照。

【原注】　妨害が故意であったか否かは、その行為に基づいて決定しなければならない。

例――バットボーイ、ボールボーイ、警察官などが、打球または送球に触れないように避けようとしたが避けきれずに触れた場合は、故意の妨害とはみなされない。しかしボールをけったり、拾い上げたり、押し戻した場合には、本人の意思とは関係なく故意の妨害とみなされる。

六・〇五　打者は、次の場合、アウトとなる。

七・〇八　次の場合、走者はアウトとなる。

七・一一　攻撃側チームのプレーヤー、ベースコーチまたはその他のメンバーは、打球あるいは送球を処理しようとしている野手の守備を妨げないように、必要に応じて自己の占めている場所（ダッグアウト内も含む）を譲らなければならない。

ペナルティ　守備妨害（インターフェア）を宣告し、そのプレイの対象であった打者または走者をアウトとする。

【注】　たとえば、プレーヤーが二本のバットを持って次打者席に入っていたとき、打者がファウル飛球を打ち、これを捕手が追ってきたので、そのプレーヤーは一本のバットを持って場所を譲ったが、捕手は取り残されたバットにつまずいたために、容易に捕らえることができたはずのファウル飛球を捕らえることができなかったような場合、プレーヤーの取り残したバットが、明らかに捕手の捕球を妨げたと審判員が判断すれば、打者はアウトになる。

八・〇二　投手は次のことを禁じられる。

(a)　(1)　投手が投手板を囲む一八㎡の円い場所の中で、投球する手を口または唇につけること。

《ただし、投手板を囲む一八㎡の円い場所の中であっても、投手板に触れる前に投球する手をきれいに拭けば、この限りではない。》

【例外】　天候が寒い日の試合開始前に、両チーム監督の同意があれば、審判員は、投手が手に息を吹きかけることを認めることができる。

ペナルティ　投手が本項に違反した場合には、球審はただちに**ボール**を宣告する。その宣告にもかかわらず、投手が投球して、打者が安打、失策、死球、その他で一塁に達し、かつ走者が次塁に達するか、または元の塁にとどまっていた(次塁に達するまでにアウトにならなかった)ときには、本項の違反とは関係なくプレイは続けられる。

八・〇五　塁に走者がいるときは、次の場合ボークとなる。